

特集にあたって

數井裕光*

2021年6月に、アルツハイマー病に対する抗アミロイド β 抗体薬 aducanumab の製造販売が米国食品医薬品局によって迅速承認された。本薬剤によってアルツハイマー病の人の脳内アミロイド β の蓄積が減少することが確認されたからである。本邦では臨床効果に関するデータが不十分と判断され、継続審議となった。しかし米国における本薬剤の承認はアルツハイマー病の人と家族に大きな希望を与えるとともに、認知症治療薬の開発をあらためて活気づけた。

近年、さまざまな認知症の脳内病理を評価できる PET 検査や脳脊髄液バイオマーカー検査が開発されてきた。そしてアルツハイマー病と考えられていた人の中にアミロイドマーカー陰性の人が存在することが明らかになってきた。したがって抗アミロイド β 抗体をはじめとする疾患修飾薬が使用可能になると、認知症の原因疾患の正確な診断がこれまで以上に重要になる。一方、疾患修飾薬の存在が世の中に啓発されると、認知症が疑われる早期受診者が増加すると思われる。関連学会では専門医、準専門医の育成に注力しているが、充足は難しいと考えられており、認知症スクリーニング検査の必要性が高まっている。血液バイオマーカー検査、機械学習や深層学習を活用して脳波デジタルデータを解析する方法などが期待されている。また情報通信技術 (ICT) を用いて神経心理検査を遠隔で実施する取り組みも始まっており早期診断と生活支援に役立つと考えられている。

早期に診断され、疾患修飾薬などによる定期的な治療を受けると、軽度認知障害で維持され、自動車を運転し、仕事を継続し、財産管理も自ら行うアルツハイマー病の人数が増える可能性がある。したがってこのような人の生活を支援する技術の開発や制度の普及が重要となる。本特集では、まず現在使用可能な薬物療法についてあらためてまとめた上で、今後の認知症診療や認知症の人の社会生活を支援するために重要となる制度や技術について解説していただき、近未来を予想していただいた。認知症診療の新潮流を多くの読者に知っていただける特集になったと思っている。

* 高知大学医学部神経精神科学教室 (☎ 783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮)